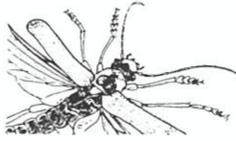


甲虫ニュース



No. 99 September 1992

COLEOPTERISTS' NEWS

日本からズカクシヒゲナガゾウムシ属を発見*

妹尾俊男

ズカクシヒゲナガゾウムシ属 (新称) *Trigonorhinus* は、アフリカ西海岸沖のベルデ岬諸島からの1新種 *T. pardalis* に基づき WOLLASTON (1861, p. 102) により創設された属であるが、その後 BEDEL (1906, p. 93) は、*T. pardalis* を地中海沿岸に分布する *Brachytarsus areolatus* BOHEMAN, 1845 の属・種ともにシノニムとした。しかし、この BEDEL の *pardalis* と *areolatus* を同種とする見解についてはのちの研究者間で認められたが、*areolatus* を *Brachytarsus* に置くことは当初から疑問がもたれていた。例えば、翌年 SCHILSKY (1907, nr. 78) は、Käfer Europa's のなかで、WOLLASTON の *Trigonorhinus* を尊重し、*Trigonorhinus areolatus* としている。

この属は1種のみで構成されていたが、北米大陸で *Brachytarsus*, *Anthrribulus* および *Brachytarsoides* に含まれてきた種類を VALENTINE (1957, p. 9) により分類学的再検討がなされた結果、前者は不正確な適用によるもので、後の2属は *Trigonorhinus* のシノニムであることが判明し、それにより北米産を単純に勘定すると本属は39種になったが、実際には13種で、残りの種類はシノニムあるいは単なる地理的変異であるという結論に達した。旧北区で唯一の *areolatus* は、ベルデ岬諸島、北アフリカのアルジェリアからスペイン、シシリー島を含むイタリアまで分布する。今のところ分かっているその他の本属の分布圏は、VALENTINE の研究によるとカナダから南米アルゼンチンにかけてである。ただし、西インド諸島からの記録はすべて誤同定によるものであるという。

この *Trigonorhinus* に便宜的に頭部が前胸に隠

れ背面から見えないのでズカクシヒゲナガゾウムシ属なる和名を与えた。属の特徴は、口吻の背面は基部から先端にかけて狭くなり、前縁の中央1/3は両端角より伸長するので、口吻中央部は両側より明らかに長い。前胸背前縁部は前方に張り出し、頭部は背面から見えない。触角の基部2節および球桿部を除く各節はきわめて短い。複眼は頭部の側面に位置し、強く張り出し、前縁で触角窩に接する。前胸背横隆線は前胸背の最基部に位置し、上翅基部に接する。

先日ある調べ物をしていたら、以前に私 (1986) が新種として記載した *Opanthribus trimaculatus* は、この属のものであることに気づいた。記載時のことを思い起こすと、上翅に顕著な黒紋をもつ本種の所属を検討した結果、複眼の位置関係およびその周辺の構造や口吻の特徴に矛盾点を認めながらも、アジアでは類縁のない *Opanthribus* を広義にとらえ、軽率にも記載してしまった。本種を改めて観察すると、上述の *Trigonorhinus* に合致した。

Trigonorhinus trimaculatus (SENOH, 1986), **comb. nov.**

ミツモンヒゲナガゾウムシ

Opanthribus trimaculatus SENOH, 1986, Kontyû, Tokyo, 54: 706.

本種は、東京都江戸川区小松

川の荒川河川敷 (川田・新里採集) および福岡県田川市東町 (高倉採集) から得られた6♂♂4♀♀に基づいて記載された。その後、和泉 (1987) は東京都大田区東六郷多摩川河川敷から得られた30個体を記録し、その際河川敷のアシ原の一角に群生するイネ科植物のスピービングにより採集したことを記している。さらに、長谷川 (1988) は、模式産地の東京と福岡の間を埋めるべく岐阜県可児郡御嵩大久後 (標

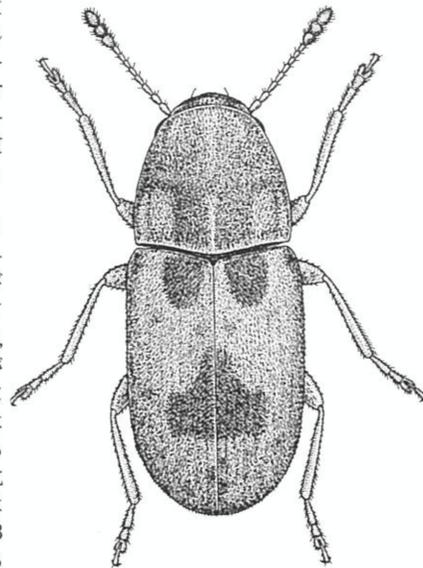


図1. ミツモンヒゲナガゾウムシ

* SENOH, T.: Discovery of *Trigonorhinus* (Coleoptera, Anthribidae) from Japan.

高約450m)から記録し、モウセンゴケ、ミカワシオガマ、ヌマガヤなどが群生する湿原のヌマガヤのスピーングで採集していることを付記した。第5番目の産地として穂積(1990)は『愛知県の昆虫(上)』で小牧市大草太良上池から報告している。

カイガラムシ類に寄生する *Anthribus* の種類以外の大半のヒゲナガゾウムシは木本植物とかかわりあって生活しているが、これまでの採集者の談話や記述などを総合すると本種は、草本植物とりわけ単子葉類とかかわりが深く、しかも水辺と関係するようである。オハイオ州立大学の VALENTINE 博士(私信)によれば、米国では本種にごく類縁の *T. limbatus* (SAY, 1827) が川の流れに沿った草地や湿地に生えている *Helenium amarum* (RAF.) (キク科マツバハルシヤギク属の一種)の花上でよく採集される、という。

分布: 日本(東京, 岐阜, 愛知, 福岡)。

形態的特徴: 体長 2.2~2.6 mm。体は黒色; 口器, 触角, 前胸背の前縁と隆起線にそった部分, 黒色毛斑の下部を除く上翅, 脚は, 暗褐色ないし赤褐色。毛は白色と黒色; 黒色毛は上翅中央に明瞭な斑紋を形成するが, 形に変異が多い。頭部は背面から見えず, 口吻の基部腹面でくびれる。複眼は比較的小さいがよく膨隆し, その膨みは後方で強く, 互いに離れる。口吻は横長, 基部で最も幅広, 前方にむかい狭くなる; 背面の両側はやや反り返り, 隆骨化する; 前縁の中央 1/3 は前方へ伸長し, 弱く湾入する。触角は短く, 僅かに前胸背側縁の中央をこえる; 柄節と梗節は卵形でほぼ等長, 鞭節の各節は短い, 第3節は

第4節とほぼ等長, 第5節はいくぶん第4節より長い, 第6節は第5節より若干短い, 第6節から第8節の各節は互いにほぼ等長, 球桿部は引締まり, 左右対称, 第9節は逆三角形, 幅の約1.3倍の長さ, 第10節は横長, 第11節はへら状, 幅の約2.5倍の長さで第9節の長さの約1.25倍である。前胸背はやや三角形で盛り上がり, 長さと同幅がほぼ等しく, 基部から1/4の部位で最も幅広になる; 前縁部は強く前方へ張り出し, 最先端部は下方へ屈曲する; 前胸背横隆線は緩やかに弧をえがき, 鈍角をもって側隆線に接続する; 側隆線は下方へ傾斜しながら側縁中央部まで伸長する。小隆起線は短い。上翅は卵形, 幅の約1.4倍の長さ, 基部から3/4まで平行; 点刻列の点刻は基部から末端にむかい小さく浅くなり, その直径は間室の幅より明らかに小さい。尾節板はほぼ台形で平坦, いくぶん前方へ傾斜する(♀は鉛直), 幅は長さの約1.25倍, 両側は截形の先端にむけて次第に狭まる。腹部の第5腹板はいくぶん下方に傾斜する(♀は水平)。脚は比較的細い。

所見: 本種は北米に分布する *Trigonorhinus limbatus* に見似ているが, 体はより細く, 体色や上翅の毛斑の色, 前胸背の形態, 横隆線の状態などの差異により識別される。体の赤みがかかる部分に関しては, 大きさや濃さにかなりの個体変異が認められる。

謝辞: 末筆ながら, *Trigonorhinus* の標本および文献を恵与下さり, さらに有益な助言を賜った米国オハイオ州立大学の VALENTINE 博士に深謝申し上げます。(中央大学附属高校生物研究室)

○チビコメツキモドキ北海道に産す

チビコメツキモドキ *Henoticonus triphylloides* (REITTER) は, 落葉下より得られる(平野, 1985) 小型のコメツキモドキで, 佐々治(1985)によれば北海道からは未記録である。北海道の主要な地域甲虫目録(保田, 1985等)にも本種は収録されていないので, 北海道初記録の可能性が高いと判断し, 次の採集例を報告する。

1頭, 北海道土幌町糠平・55メトセツ林道, 11. vi. 1989, 芳賀馨採集, 上野輝久同定・所蔵。

山土場の針葉樹材の切口に浸出した松ヤニに付着していた。

筆者は, 上記の個体と同種と判断される標本を本州でも採集しているので, この機会にあわせて報告しておく。

1頭, 東京都奥多摩町御岳山~大橋峠, 29. iv. 1983, 芳賀馨採集; 1頭, 神奈川県伊勢原市大山・7段の滝付近, 21. iv. 1985, 芳賀馨採集。

奥多摩の個体は, 広葉樹の枯枝の叩き網で採集した。大山では水際の落葉をふるいにかけて採集した。なお, 林・平野(1987)の目録にも本種は含まれておらず, 大山での記録はないか非常に少ないと思われる。

以上3例のうち2例は落葉下以外の環境からの採集であるので, 本種の生息環境は必ずしも落葉下には限定されないと考えられる。

末筆ながら北海道の標本につき同定を賜り発表を勧められた上野輝久氏, 文献の入手に便宜を図って下さった難倉正人氏, 平野幸彦氏, 山之内統氏に厚くお礼申し上げます。

参考文献

- 林 長閑・平野幸彦, 1987. 大山原生林の甲虫類, 神奈川県指定天然記念物地域動物調査報告書, pp. 203-227.
平野幸彦, 1985. 落葉下の甲虫. 昆虫と自然, 20(12): 4-8.
佐々治寛之, 1985. コメツキモドキ科, 原色日本甲虫図鑑(III), pp. 212-217. 保育社.
坂本与一・門崎允昭, 渡辺 潔, 1976. 野幌森林公園の昆虫類. III 鞘翅目. 北海道開拓記念館調査報告, (11): 43-80.
田口 明, 1981. 北海道未記録? の昆虫(2). 昆虫と自然, 16(8): 39.
山之内統, 1975. 天宝山の昆虫相. ひがし大雪博物館友の会会報, (1): 33-61.
保田信紀, 1985. 上川町(大雪山・石狩川源流地域)の甲虫類第X報(総目録), 上川町の自然・生物目録集, pp. 111-167. 上川町自然科学研究会.

(東京都調布市, 芳賀 馨)

○フジコバヤハズカミキリの奥秩父西端・信州峠からの採集例

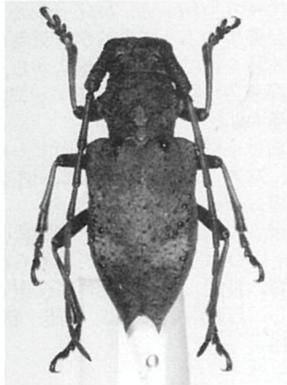
奥秩父西端部におけるコバヤハズカミキリ類の分布態はきわめて興味深く、近年の解明の進展ぶりには著しいものがあるが、山梨県北巨摩郡須玉町と長野県南佐久郡川上村との境の信州峠付近はたびたびの探索にもかかわらず記録の空白地帯のままであった。しかし1991年、ゾウムシ類調査に訪れた堀川正美氏により、ついに1頭のフジコバヤハズカミキリ *Mesochthistatus fujisanus* HAYASHI が得られるに至ったので、勇躍ここに記録することとした。

1♀、長野県川上村信州峠、24, viii, 1991, 堀川採集、筆者保管(写真)。

信州峠から長野県側に少し向かったところから右手に入る林道上で得たもので、周囲はカラマツ林であったという。

奥秩父の山梨県側における本種の記録は平井(1989, 月刊むし, (225): 32-35)により詳しくまとめられているが、それによれば最西端の記録地は須玉町増富西方の落合、枇杷窪沢(米沢, 1988, 月刊むし, (214): 15)であり、この付近ではその後も多数が得られている。今回の信州峠の採集地点はこの増富西方の産地から北北西へ直線距離で7kmほど離れているが、その間にはきわだった地形的障害は認められず、本種が連続的に分布していることが期待される。実際、未発表ながら、その間に位置する金山高原での採集例があるという(小林信之氏による)。一方、奥秩父の長野県側については筆者は情報を聞き得ない。あるいは川上村西沢～甲武信ヶ岳(高桑, 1974, 甲虫ニュース, (17/18): 4)との間の広大な地域で分布記録が空白のままかもしれない。

思えば筆者にとって、信州峠のコバヤハズカミキリ類には特別な思い入れがある(ちなみに高桑, 1987, コバヤハズカミキリ類とその非武装地帯。カミキリムシの魅力, pp. 185-232を参照願いたい)。その果たせなかった夢は堀川氏によってようやくかなえられたが、さらに西方の横尾山や飯盛山方面の広い一帯がいまなお分布の空白地帯である。本種が分布を延ばしているのか、それともタニグチコバヤハズカミキリの分布圏なのか、あるいは双方とも分



布していないのか、今後のさらなる調査をお願いしたいと思う。

末尾ながら、貴重な標本を恵与され、その発表を委ねられた横浜市の堀川正美氏、ならびに奥秩父のフジコバヤハズカミキリの情報をうかがった本会の露木繁雄氏と小林信之氏に心から感謝申し上げる。

(神奈川県立博物館, 高桑正敏)

○セキレイに捕食されるキバナガミズギワゴミムシ

福島県相馬市の松川浦に注ぐ宇田川は、河口附近の大部分が護岸されていて、河口性昆虫の採集には不適である。しかし、1キロ程上流に干潮時に出現する中洲があって、ここには汽水域に固有のキバナガミズギワゴミムシ *Armatocillenus yokohamae* (BATES) が生息し、個体数もきわめて多い。中洲は小石まじりの砂泥質で、満潮時には完全に水没するが、潮が引くと一部が右岸につながるの容易に渡ることができる。以下は、筆者が昨年(1991)の5月22日に、この中洲で観察したことである。

キバナガミズギワゴミムシは、初めは小石の下に潜むものや、砂泥を浅く掘ると現われるものを採集していたが、午後の陽光に照らされて表面が乾いてくると、どこからともなく湧くように出現して地表を走る個体が目立つようになった。かがんで見ていると、ほぼ直線的に走行する成虫にまじって、蛇行気味に歩行する本種の幼虫と思われるものも少なからず認められた。成虫の出現密度はかなり高く、およそ1平方メートル当り10頭前後を数えることもあった。30分足らずで若干の幼虫を含む100頭以上の収穫があり、好生息地の発見に満足して岸に戻る。

少憩の一服を楽しんでいると、2羽のハクセキレイが飛来した。1羽は黒色部が淡い雌で、繁殖期に入った番(つがい)と見受けられた。10メートルほど先で中洲に降下したセキレイ達は、小走りに何かを追尾し、頭をさげて啄む動作を繰り返している。明らかに採餌行動である。採餌のようすや頻度から察して、対象がキバナガミズギワゴミムシであることは疑いない。勿論、高倍率の双眼鏡で観察するか、胃の内容物を調べなければ確認し得ないことであるが、最前まで筆者が調べた限りでは、中洲の地表で活動していたのはキバナガミズギワゴミムシだけで、ほかにセキレイの食餌となりそうな昆虫はおろか、小型の甲殻類や貝類もまったく見られなかったからである。

試みに腕時計で計ってみると、毎分23~26回ほどの採餌動作が観察された。敏速ともいぬ直線走行の餌を、鳥のくちばしが捕え損うことはないだろう。毎分平均25頭として、およそ5分後に飛び去った2羽のハクセキレイが捕食した個体は推計250頭ほどになろうか。体長4ミリ内外の小昆虫250頭は、生物量として決して大きなものではないが、これほど多数が短時間で鳥に喰われるゴミムシはそうないだろう。しかし考えてみれば、キバナガミズギワゴミムシが鳥に捕食される機会は、その特

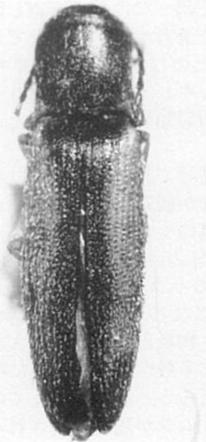
殊な生態のゆえに、かなり限定的である。すなわち、晴天下(雨天では地表活動をすることはまず無い)、日中の気温が高い頃に干潮時が一致しなければならない。また、そのような折に、必ず鳥が飛来するわけでもないだろう。したがって、良好な生息環境で繁栄する大きな集団にとっては、鳥による一時的もしくは偶発的?な捕食圧は、それほど大きな影響を及ぼさないのかもしれない。むしろ、多数の個体が白晝に地表活動をして天敵に遭遇するのは、集団が優勢であることの証左とも考えられるのである。なぜなら、筆者のこれまでの経験では、狭少な生息環境で細々と存続するような小集団が、前述のごとき条件下でも地表活動をするのを見たことがないからである。前日のほぼ同時刻に、宇田川の南方約17キロにある相馬郡鹿島町の真野川河口で見付けた本種がそうであった。同一種内における対照的に異なる生態が、単純に集団や環境の大小優劣に起因するとも思えないが興味深いことではある。

ハクセキレイが去った中洲に戻ってみると、確かに先刻より数は減っていたが、相変らずキバナガミズギワゴミシの活動が認められ、他の生物を探したが、微少なトビムシ類が見付かっただけであった。これはゴミシの捕食対象となっても、鳥のそれではないであろう。(千葉県船橋市、笠原須磨生)

○ホソナカグロヒメコメツキの秋の発生

本種(*Dalopius tamui*) (図)は、本州の中部以西から四国、九州の各地の照葉樹林に広く分布している。愛知県三河地方では4月中旬頃から6月頃にかけて発生し、7月以降は殆どみかけなくなる。しかし、1991年9月30日に愛知県の段戸裏谷(標高約800m)のブナ類の原生林でクモ類を調査されていた緒方清人氏は、下草の笹葉をスィーピングして本種を10個体ほど採集された。裏谷では紅葉が始まる季節である。

春から初夏にかけて成虫が出現する種は、一般に夏までに交尾と産卵を終え、成虫は死亡するものと思われる。このように晩秋に成虫が出現するのは、夏から秋にかけて蛹化した新成虫と思われ、通常は



その蛹化場所に止って冬を越す。

本種も夏から秋に腐葉土中で蛹化、そこで新成虫になった個体が何かの原因で地上に出てきたのではないかと思われる。これは本種の一般的な生態ではないと考えられるが、大変興味あることなのでここにその個体を図示して記録することにした。

(愛知県岡崎市、大平仁夫)

○アオタマムシの新産地

国立科学博物館植物研究部の土井祥兌博士は、1968年8月7日に群馬県神流川上流の多野郡上野村中ノ沢附近で帽子に飛来したアオタマムシ *Eurythya tenuistriata* LEWIS, 1892, 1♀を採集され、土場に積まれた材木に集した多数の本種を目撃された。同地は埼玉県に隣る群馬県では最南部にあるが、恐らく、関東山地における本種の最北の記録地となるであろうと思われるので、土井博士の許しを得てあえて記録することにした。発表を快諾された土井博士に深謝する。(東京都世田谷区、黒沢良彦)

○ハネグロホソアリモドキの新産地

ハネグロホソアリモドキ *Anthicus formicarius* (GOEZE) はコスモポリタンな種とされているが、日本からは、トカラ中之島、奄美大島での記録があるのみで、その他からの報告はないようである。

筆者は三浦半島および横浜市南部の標本を所持しているため、新産地として記録する。

1頭、神奈川県三浦市三戸海岸, 20. iv. 1989, 渡弘採集; 1頭、横浜市磯子区水取沢市民の森, 1. viii. 1991, 久保浩一採集; 13頭、横浜市磯子区水取沢市民の森, 2. iv. 1992, 久保浩一, 渡弘採集。

水取沢市民の森では、3月下旬から4月にかけての温暖な日には、畑に張られた防風用の青いサランネットに多数の本種が、アトグロホソアリモドキ、ウスモンホソアリモドキと共に飛来する。その他、畑の野菜屑下や積葉からも発見され、近似のアトグロホソアリモドキよりも個体数は数倍多い。

末筆ながら、本種を同定していただき、また本種について種々御教示いただいた酒井雅博氏に、また採集に協力していただいた久保浩一氏に厚く御礼申し上げます。(横浜市港南区、渡弘)

○北海道におけるヤハズカミキリの記録

ヤハズカミキリ *Uraecha bimaculata* THOMSON は北海道では僅少のようであるが、筆者は下記の通り同地にて本種を得ているので報告する。

2♀, 北海道苫小牧市トキサタマップ川, 25. vii. 1991, 岩田隆太郎採集。

二次林における枯葉付き伐採枝のピーティングで同時に得た。なおこれらの個体は本州産のものとの間に形態の差はほとんど見られない。

採集当日筆者に同行頂いたカナダ国農務省の Dr. A. SMETANA, 並びに記録の発表を勧められた北海道庁の菅原豊, 長尾康の両氏に御礼申し上げます次第である。(日本大学農獣医学部、岩田隆太郎)

沖縄県宮古島の歩行虫 笠原 須磨生

最近、筆者は石田正明氏から沖縄県宮古島産の歩行虫類多数を頂いた。これらは、清水清市氏が1987年7月13日に、同島の平良市亜熱帯植物園前と上野村野原に設置された各一基の“誘殺灯”から採取した甲虫類の一部である。内容は、オサムシ科の8亜科に属する21種689頭で、ほとんどの種は既に八重山諸島の各地から知られているものである。しかし、宮古島の歩行虫に関する報告は少なく、東・金城(1987)による「沖縄県産昆虫目録」にもわずかな種が記録されているにすぎない。したがって、清水氏の採品の多くは同島未記録の種と思われる。分布資料としても貴重なものと考え、両氏のご好意に報いるべく謝意をこめてここに報告する次第である。

なお、清水氏の略図によると、“誘殺灯”とは、光源に誘引された昆虫を電撃で捕殺する装置のようで、付設の漏斗に落下した虫体がパイプを通して末端のビニール袋に集積される仕組みになっている。

Bembidiinae ミズギワゴミムシ亜科

1. *Tachyura fumicata* (MOTSCHULSKY) クリイロコミズギワゴミムシ: 3頭, 上野村。

2. *Tachyura lutea* (ANDREWES) チャイロコミズギワゴミムシ: 1頭, 上野村。

シンガポール原産。台湾、ハワイ、タヒチ、サイパンなど太平洋の各地に広く分布する。日本では本州・四国・九州から知られているが、琉球列島では初めての記録である。灯火に飛来した例が多い。

3. *Bembidion niloticum batesi* PUTZEYS アトモンミズギワゴミムシ: 2頭, 上野村。

Pterostichine ナガゴミムシ亜科

4. *Caelostomus picipes japonicus* TSCHITSCHÉRINE ムネミヅマルゴミムシ: 1頭, 上野村。

5. *Colpodes buchanani* HOPE オオアオモリヒラタゴミムシ: 11頭, 平良市; 18頭, 上野村。

6. *Colpodes obscuritarsis* CHAUDOIR トゲバナモリヒラタゴミムシ: 2頭, 上野村。

頭・胸部の色は、1頭が黒色、他の1頭は暗赤色。

Harpalinae ゴモクムシ亜科

7. *Oxycentrus changi* HABU ニセクビナゴモクムシ: 3頭, 平良市; 1頭, 上野村。

台湾原産。八重山諸島では西表島に記録がある。

8. *Platymetopus flavilabris* (FABRICIUS) カラカネゴモクムシ: 2頭, 平良市。

9. *Stenolophus quinquepustulatus* (WIEDEMAN) イツホシマメゴモクムシ: 256頭, 平良市; 196頭, 上野村。

全種総個体数の66%を占める。上翅の斑紋は変化に富み、肩部にのみ小紋を残すものから、翅端の3紋が拡大連結したものまで多様で、体長にも大小の差がかなりある。

10. *Acupalpus inornatus* BATES キイロチビゴ

モクムシ: 2頭, 上野村。

Panagaeinae ヨツボシゴミムシ亜科

11. *Dischissus japonicus* ANDREWES ニッポンヨツボシゴミムシ: 3頭, 上野村。

脛節がやや暗色の個体と黄褐色のものがある。

12. *Microcosmodes flavopilosus* (LAFERTÉ) ヒメヨツボシゴミムシ: 5頭, 平良市; 2頭, 上野村。

13. *Peronomerus fumatus* SCHAUM カラカネケブカゴミムシ?: 4頭, 平良市; 5頭, 上野村。黒色で銅光沢はないが、淡黄褐色の長毛を密生する。本種と *P. nigrinus* BATES クロケブカゴミムシとの異同が判然としないが、BATESが最初(1873)に述べているように、クロケブカはカラカネケブカの地域変異かもしれないし、二度目に言及しているように別種かもしれない。BATES(1883)がクロケブカの長崎における乾燥した生息環境の記述に続けて“distinct from *P. fumatus*”と記しているのは、種の相違よりも生息個所の相違を強調しているようにも読める。この前頁でカラカネケブカを京都の巨椋池から記録しているだけに、両者の生息適地に乾燥地と湿地という対照的な相違があることは確かなようである。このことから推して、筆者が与那国島の湿地から記録(1980)したものや、関東地方各地の湿地や河川敷に見られる種は、カラカネケブカとすべきかもしれない。これらは陰茎に長三角形のキチン質薄片を内蔵し、その形態は、宮古島産も関東地方産もまったく同じである。

Callistinae アオゴミムシ亜科

14. *Chlaenius virgulifer* CHAUDOIR アトワアオゴミムシ: 3頭, 平良市; 2頭, 上野村。

15. *Chlaenius pictus* CHAUDOIR ミナミアトワアオゴミムシ: 1頭, 平良市。

八重山諸島では西表島と石垣島に記録がある。

16. *Chlaenius micans* (FABRICIUS) オオアトボシアオゴミムシ: 50頭, 平良市; 15頭, 上野村。

17. *Oodes piceus* NIETNER コトックリゴミムシ: 3頭, 上野村。

Perigoninae ホナシゴミムシ亜科

18. *Perigona nigriceps* (DEJEAN) クロズホナシゴミムシ: 20頭, 平良市; 52頭, 上野村。

Odacanthinae クビナガゴミムシ亜科

19. *Eucolliuris fuscipennis* (CHAUDOIR) アトモンクビナガゴミムシ: 1頭, 上野村。

Lebiinae アトキリゴミムシ亜科

20. *Anomotarus stigmula* (CHAUDOIR) キボシアトキリゴミムシ: 3頭, 上野村。

琉球列島では未記録であったと思う。2個体は、上翅肩部と翅端の斑紋がそれぞれ前後に伸長して、V字型に連結する *f. vittatus* KASAHARA, 1992 (Elytra, 第20巻32頁参照)。

Dryptinae ホソゴミムシ亜科

21. *Drypta lineola virgata* CHAUDOIR ヒロアオヘリホソゴミムシ: 14頭, 平良市; 8頭, 上野村。

(千葉県船橋市)

○オオヨモギハムシ早池峰山に産す

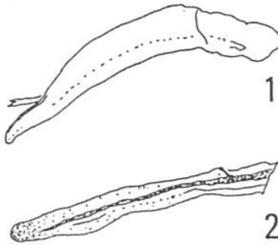
オオヨモギハムシ *Chrysolina angusticollis* (Motschulsky) は、北海道・本州北部・シベリア東部・中国東北部に分布する飛翔能力を欠くハムシである。本州からは青森県だけが知られているようで、十二湖¹⁾、小泊村¹⁾²⁾、三度村、金木町、蓬田村、岩木山、八甲田大岳、白神山地の赤石川と追良瀬川²⁾から記録されている。筆者らは、これらの産地から飛び離れた岩手県の記録をここに報告したい。

3♂♂, 早池峰山小田越, 11. x. 1987.

針葉樹立ち枯れの樹皮下で越冬していた個体。高橋採集, うち1♂雑倉保管。

当地の個体は全身銅色で、体長6mm強と小型。上翅表面に網目状の微細印刻を有しており、*angusticollis* の特徴を示している¹⁾。陰茎は短く、末端部が弓状の屈曲がないので、この点では近似種 *C. aino* に似ている(図1)。後翅は幅が狭くて末端部が広がらず、青森や北海道渡島半島の個体に似る(図2)。

発表を勧められた小宮義璋博士、ならびに青森の記録をご教示頂いた北大理学部の齋藤 諭氏にお礼申し上げる。



1mm

参考文献

1) HASEGAWA, T., 1980. Insecta Matsumurana (new series), (21): 1-17.

2) 下山健作ら, 1982. 青森県立郷土館調査報告第12集・自然1: 113, 147.

(浦和市, 雑倉正人; 岩手県胆沢町, 高橋泰美)

○群馬県におけるゴミムシ2種の記録

1. ヒョウゴマルガタゴミムシ *Amara hiogoensis* (BATES)

1♂, 群馬県富岡市下高瀬, 25. i. 1992; 1♂, 群馬県富岡市砂田, 8. iii. 1992.

本種の記録は群馬県では沼田市より報告されているが、戦前の記録で採集データも不明の様である。関東地方における本種の既知産地は筆者の知るかぎりでは茨城県里美村、栃木県足利市及び未発表であるが千葉県三ヶ所に過ぎない。里美村以外では個体数も少なく1~2頭の採集例のようである。上記2例とも雑木林が背後にある比較的湿った黒土の崖より採集した。

2. ヒコサンツヤゴモクムシ *Trichotichnus noc-*

tuabundus (HABU)

1♂, 群馬県富岡市茶臼山, 8. ii. 1992; 1♂1♀, 群馬県甘楽郡甘楽町紅葉山, 20. iii. 1992.

本種も比較的採集例の少ない種で関東地方における既知産地は筆者の知るかぎりでは神奈川県三浦半島、千葉県南部、東京都大田区、の三ヶ所で群馬県からは初記録と思われる。三浦半島では多産するようであるが筆者は葉山町で20頭採集している。上記2例とも桑畑の中の非常に乾燥した崖より採集した。

参考文献

須田 亨, 1985. 群馬県の甲虫類(群馬県動物誌).

笠原須磨生, 1982. 千葉県の歩行虫類. 千葉生物誌, 32(1).

———1984. 大田区の歩行虫類(大田区自然環境保全基礎調査報告書).

大川秀雄・佐藤光一, 1990. 栃木県足利市産のゴミムシ. 栃木県立博物館研究紀要, (7).

(東京都大田区, 和泉敦夫)

○ナカグロキバネクビナガゴミムシ宮崎県に産す

ナカグロキバネクビナガゴミムシ *Odacantha puziloi* SOLSKY は、筆者の知る限りにおいて、九州からの記録はない。数年前、筆者は下記のように宮崎県内で採集しているので、報告しておきたい。1頭、宮崎県延岡市大貫町, 27. v. 1985, 筆者採集。



末筆ながら同定にご協力していただいた高井泰氏に厚くお礼申し上げる。(宮崎県延岡市, 木野田毅)

○石垣島からアマミマメヒゲナガゾウムシの記録

筆者は最近、東京農業大学昆虫学研究室の奥島雄一氏のご好意により、石垣島で採集されたアマミマメヒゲナガゾウムシ *Misthosima brevitarsis* SENOH を検する機会に恵まれた。本種は奄美大島の湯湾岳から採集された1♂2♀♀に基づき記載された小型のヒゲナガゾウムシである。その後、沖縄本島の与那林道からも追加記録(妹尾, 1991)されている。1頭、石垣島平窪, 6. iii. 1990, 奥島雄一採集。

分布: 奄美大島, 沖縄本島, 石垣島。

末筆ながら、貴重な標本を恵与された奥島雄一氏に深謝申し上げます。(中央大学附属高校, 妹尾俊男)

○再びヒゴヒラタエンマムシについて

Elytra, 19 (2): 238~242 (1991. XI) に Masahiro ÔHARA (大原昌宏) 氏はヒゴヒラタエンマムシ *Hololepta (Hololepta) higoniae* LEWIS, 1894 の詳細な再記載をしている。しかし、氏が検された標本のデータには誤があるうえに、参考文献にも脱落があるので証正しておきたい。

まず、被検標本のデータについては、氏が検視された本州産の標本はすべて私が同時に同一場所で同一の朽木から採集した標本であることである。氏の論文によれば、氏の検された標本は2♂♂1♀と5頭が Kita-aizu, 15-IV-1950, で Y. KUROSAWA 採集 (NA) と11頭が Ohta, Aizu-Wakamatsu, 15-IV-1950, Y. KUROSAWA 採集 (NSMT) となっている。NA は中根猛彦所蔵, NSMT は国立科学博物館所蔵を表している。従って、大原氏が検視した標本は Y. KUROSAWA 氏が、同じ日に Kita-aizu (北会津) で8頭, Ohta, Aizu-Wakamatsu [会津若松市大戸町 (!)] で11頭を採集したように見える。しかし、これらの標本は全部私 (黒沢良彦) が1950年4月15日に福島県北会津郡大戸村桑原 (現在は会津若松市大戸町桑原となっている) で友人の永山幸一、五十嵐敬治両氏と共に路傍に積んであった1本の腐朽材の樹皮下から得た多数の本種の中の一部である。その詳細はすでに昆虫学評論, 6: 24 (1952) の短報で記録してあるが、どうやらこの短報は大原氏の眼から漏れたらしい。この短報では私たちの採集した頭数を、ただ「多数を得た」とのみ記しておいたが、実際には48頭を採集している。もち論、中根猛彦君所蔵の8頭は私が彼に進呈したものであるし、国立科学博物館の11頭も私の手許に残った標本を私が納めたにすぎない。北隆館の原色昆虫大図鑑, (II) 甲虫篇に用いられた標本も、保育社の原色甲虫図鑑, II に掲載された標本もすべて私の採集品である。私はこの記録は、G. LEWIS の原記載以後始めての日本からの記録で、本州からは最初の記録であると思っているので、短報ではあるが無視し得る些細な記録ではないと思っているが、我田引水であろうか。私の脳裏には、一割ぎした樹皮下に散らばる漆黒の本種の姿がいまだに強く焼き付いている。

ヒゴヒラタエンマムシについて、大原氏はもう一つ重要な文献を無視している。三輪勇二郎博士の日本甲虫分類学 (西ヶ原刊行会, 東京, 1938) である。この中で三輪博士は本種を図示し (84頁), 簡単な解説 (85頁) を与えている。解説はさることながら図は本種の最初の図示例でやはり無視出来るものではない。

なお、大原氏の示した産地, Ohta, Aizu-Wakamatsu は Ohto の誤認で、国立科学博物館において来た私の標本のラベルの見誤りである。

(東京都世田谷区, 黒沢良彦)

◇論文紹介◇

「Neue Bockkäfer aus Europa und Asien/Neue Bockkäfer aus Asien II」HOLZSCHUH, C., 1991 著

著者 Carolus HOLZSCHUH 氏は、ウィーン在住のカミキリ研究者で、1969年からアジア大陸地域〜ヨーロッパの材料を中心に分類学的研究を精力的に進めていて、すでに多数の著作を発表している。日本にも知己が多く、彼の論文の謝辞には標本提供者として日本の研究者の名前も頻りに登場することから、その名前くらいはご存在の方も少なくないだろう。HOLZSCHUH 氏の研究はむしろ徹底した記載分類学で、これまでも多数の新種を命名してきたが、昨年2度にわたり出版された上記表題の論文では、一挙に141種 (うち2亜種を含む) の新名を発表して、驚かされた。今回の論文で用いられた標本は、インドおよびタイ、ベトナム、中国 (四川・雲南) が中心で、一部にスリランカや中近東などを含んでおり、日本および近隣のカミキリの研究をする者にとっては無視することのできない内容である。ここではそれぞれを再録することはできないが、この論文 (3編に分かれている) を未見の方の便宜のために、扱われた属と新名の数を整理しておく (属名の後の () 内は新名の数)。

・33 neue Bockkäfer aus der palaearktischen und orientakischen Region (Coleoptera, Cerambycidae)], Fbva-Berichte, Wien, (51): 5-34.

Anisorus (1), *Pachyta* (1), *Pidonia* (1), *Ischnostrangalia* (1), *Parastrangalis* (1), *Asilaris* (1), *Metaloleptura* (1), *Cartallum* (1), *Pyrestes* (1), *Ischnodera* (1), *Chlorophorus* (1), *Phaphuma* (6), *Demonax* (4), *Cleomenes* (4), *Nidella* (2), *Kuraru* (5), *Mallosia* (1).

・45 neue Bockkäfer aus Asien, vorwiegend aus Thailand (Coleoptera, Disteniidae und Cerambycidae)], ditto, (51): 35-75.

Cyrtionops (1), *Pachydissus* (1), *Dymasius* (5), *Ceresium* (1), *Stenodryas* (1), *Ibidionidum* (2), *Merionoeda* (1), *Kunbir* (1), *Euryarthrum* (1), *Pyrestes* (1), *Epiclytus* (1), *Chlorophorus* (3), *Rhaphuma* (7), *Demonax* (11), *Anaglyptus* (1), *Epipedocera* (1), *Clytellus* (2), *Kuraru* (2), *Dere* (2).

・63 neue Bockkäfer aus Asien, vorwiegend aus China und Thailand (Coleoptera, Disteniidae und Cerambycidae)], ditto, (60): 5-71.

Cyrtionops (2), *Encyclops* (1), *Gaurotina* (1), *Lemula* (1), *Pidonia* (9), *Neoencyclops* (1), *Grammoptera* (1), *Kanekoa* (1), *Anoploderomorpha* (1), 新属 *Katarinia* (1), *Brachyleptura* (1), *Pedostrangalia* (1), *Leptura* (1), *Ischnostrangalis* (1), 新属 *Emeileptura* (1), *Pygostrangalia* (1), *Nanostrangalia* (1), *Idiostangalia* (1), *Parastrangalis* (5), *Elacomia* (1), *Iranobrium* (1), *Merionoeda* (9), *Epania* (4), *Glaphyra* (1), *Amamiclytus* (3), *Rhaphuma* (1), *Demonax* (6), *Psilomerus* (1), *Paramimistena* (1), *Procleomenes* (1), *Dorcadion* (1), *Phytoecia* (1). 本論文では、*Pygostrangalia*, *Parastrangalis*, *Merionoeda* の3属のレビューを含む。

日本のカミキリ採集家が、東南アジア遠征をはじめておよそ20年近くになるが、標本の蓄積はあっても、研究成果はたいしてあがっていないのが現状である。それに比べれば、欧州では標本収集も含めて着実に成果をあげている。多数のタイプ標本を博物館に保有する欧州諸国とは、研究環境のうえで比肩できないのかもしれないが、それにしてもこの状態が続くならば、アジアのカミキリを調べるために、われわれはこの先もずっと欧州詣でを繰返さなければならぬ。少なくとも、アジアでは先進国の日本の研究者は、奮起する必要があるだろう。

((株)環境指標生物, 新里達也)

◇新刊紹介◇

「フィールドガイド小笠原の自然」小笠原自然環境研究会編, 46頁, vi+144頁, 1992年1月, 古今書院刊, 定価1,800円。

副題に「東洋のガラパゴス」, 帯に「小笠原図鑑」とうたっている通り, 特産動植物と地形その他のカラー写真を豊富に使いコンパクトにまとめた格好のガイドブックである。各章は, 小笠原の自然への招待: 自然観察モデルコース: 開拓と自然破壊の歴史: 地質: 植物相: 哺乳類: 鳥類: 両生・ハ虫類: 昆虫: 土壌動物: 陸産貝類: 化石: 特殊病害虫: 淡水生物: 陸生甲殻類: 小笠原のアオウミガメ, となっていて索引が付き, 専門家が分担執筆している。

昆虫は, チョウ: トンボ: 甲虫: アリ: その他で, 甲虫(中根猛彦氏担当)は, オガサワラハンミョウ, オガサワラチビクワガタ, オガサワラタマムシ, ヒゲジロアラゲカミキリなど固有種の写真を添えて甲虫相の特徴を簡潔にまとめている。甲虫屋にとってとくに目新しい点はないが, むしろ, 独特の生物相をもつ小笠原の自然を概観するのに便利な一書といえよう。前後の見返しに, 父島・兄島と母島の地図(国土地理院1/50,000に加刷)が刷られているのもよい。

(笠原須磨生)

◇「甲虫ニュース100号記念パーティー」の予告◇

昭和43(1968)年2月に本誌第1号を世に送り出してから既に24年の歳月が経ち, この12月にめでたくも100号を迎えることになりました。つきましては, 来る12月20日(日)夕刻, 上野の国立科学博物館近くの弥生会館にて記念パーティーを開催する予定です。その旨お手帳にご記入くだされば幸いです。詳しくは追ってご案内申し上げます。

(甲虫ニュース編集幹事)

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号, 有頭ダブル針も出来ました。その他, 採集, 製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6
振替 東京(3) 21129
電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)
FAX (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社

◇例会報告◇

本年度第2回例会は恒例の採集談話会とし, 今回は静岡甲虫談話会の協賛を得て, 5月9日(土)~10日(日)に静岡県奥大井の接組峡温泉で行いました。残念ながら天気には恵まれませんでした。雨の合間に見る山峡の新緑の美しさは格別で, そここで雨具を付けて採集に励む会員の姿もみられました。9日午後6:30に借り切った宿舎の囲炉裏のある広間に集合。上野会長, 黒沢・草間両名誉会員, と静岡甲虫談話会の石川会員の挨拶に続き田添会員の乾杯の辞をもって開宴。山の幸を主菜とする晩さんを楽しみました。食後, 一人一話の談話会を行い, 初参加, 初対面の会員同志もうちとけて, 豊富な話題に興じることができました。9:00終了後はそれぞれの部屋で座談と酒宴が続き, 深更に及ぶ部屋もあったようです。10日は朝食後に記念撮影をし, 弁当や土産の新茶を手に随意解散として採集談話会を無事終了いたしました。

ご協力いただいた静岡甲虫談話会ならびに民宿「接組」各位に厚く御礼申し上げます。



参加者氏名(ABC順敬称略) 荒井充朗, 出口可也, 平野幸彦, 石川均, 伊藤勇, 笠原須磨生, 岸本年郎, 黒沢良彦, 草間慶一, 松本浩一, 向井田明, 中村俊彦, 菲沢幸世, 西山明, 小田博, 蕭嘉廣, 曾根信三郎, 田口正樹, 高桑正敏, 田尾美野留, 田添京二, 鳥羽明彦, 土橋秀行, 露木繁雄, 上田康之, 上野俊一, 吉田篤人(例会担当, 笠原須磨生)

日本鞘翅学会

会費(一ケ年)5,000円, 次号は1992年12月下旬発行予定

発行人 上野俊一

発行所 日本鞘翅学会 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館昆虫第1研究室

電話(3364)2311, 振替東京8-401793

印刷所 (株)国際文献印刷社

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥6,200, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,870, 送料一箱につき都内及第一地帯: 3個以下 ¥1,300, 4個以上 ¥850(以下同様), 第2地帯 ¥1,500, ¥950, 第3地帯 ¥1,700, ¥1,050, 其他, 各種器具, 針などを製作販売しています。カタログを御請求下さい。(¥60)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島2-21-25
電話(03)3811-4547, 振替6-113479